

令和3年度第1回 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館運営協議会

日 時 令和4年3月8日(火)午後1時30分～3時00分
場 所 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 体験交流室
出席委員 岡村道雄会長 高田和徳委員 山下治子委員 川口桂子委員
事務局 工藤館長 松橋副館長 渡参事 小久保副参事

次第

1. 教育部長挨拶

2. 会長挨拶

3. 会 議

- (1) 令和2年度事業報告について
- (2) 令和4年度事業計画について
- (3) その他

案件(1) 令和2年度事業報告について

(事務局説明)

岡村会長:ただいまの報告で何かご質問、ご意見はありますか。よろしいですか。では、次お願いします。

案件(2) 令和4年度事業計画について

(事務局説明)

岡村会長:ありがとうございました。何かご質問、ご意見をお願いします。

川口委員:資料7ページに常設展示の一部展示替とあるのですが、どの程度実施されるのですか。

事務局:毎年、重要文化財是川遺跡出土品の保存修理をしているため、これに関連して数点入れ替えをする程度です。全面的な入れ替えではなく、資料保存の為の入れ替えです。

川口委員:常設展示室などを何度かみさせていただいて、展示が本当に美術館のようにアーティスティックで美しいと思っています。リピーターが多いのかなという感じで、保

存しながらみせるという工夫がとても凝っていて印象的なのですが、何度か出かけてみると、やはり新鮮さが薄れてくるという声も聞いています。

常設展示室の、みて楽しむ空間としては、あのままの展示内容でよいかと思うのですが、縄文の謎展示室にある土層や動物の骨、木の実、種などの展示ブースには、色々説明するためのパネルなどを置けるスペースがあるので、あそこを読んで楽しむ、学習できるようなコーナーとしてテーマを入れ替えたり、もう少し内容を絞って入れ替えたりする展示をしていただければいかがでしょうか。こっちはみる空間で、こっちは学びの空間となっているような感じで、何回行っても同じというのは、やはりリピーターを取り込めないのではないかなと思います。常設展示の在り方という点で色々な声を聞いたりしますので、参考にいただければと思います。

事務局:ありがとうございます。

岡村会長:補足説明ありますか。

川口委員:変えることがあってもいいのかなと思ったりするのですが、難しいですか。

事務局:開館から10年、展示自体は大きくは変わっておりませんので、検討が必要と思います。常設展の目新しさが失われている点については、展示替えを行う最新研究報告のコーナーや企画展示で補い、いつ館に来ても新しい情報に出会えることを目指していこうということをコンセプトに取り組んでおりました。確かに10年間変わらない展示は、そろそろ考える時期にあるかと思いました。

岡村会長:御所野縄文博物館は1回リニューアルしましたね。

高田委員:御所野縄文博物館では、展示というよりは映像などを変えました。映像、解説パネルなどを10年経ってから変えました。展示品はほとんど手をつけてないです。

岡村会長:プロジェクションマッピングがありますね。

高田委員:10年後のリニューアル時に導入しました。

岡村会長:だいぶアートな感じになって、自然との共生が体感できるようなものに大きく変わった。あれも10年経ってからですか。

高田委員:10年経ってからです。

岡村会長:節目に目新しさを狙うだけではなくて、やはり資料の追加ですとか、展示そのもののレイアウトも時代の流れがある。そういう点では、ここの展示はライティングやデザインを気にしてつくられていて、当時は新しかったのですよね。だけどそれは、今みてどうなのか。あるいはこれから世界遺産として発信する時にもう一工夫あるのかなと思います。

この頃、博物館というものは年配の方が行くだけの場所ではなくなっているのです。だから若い人向けに、若い人もわかるようなキャッチフレーズですとかそういったものが求められてもよい気がしますけどね。時代の流れも踏まえて、そろそろ今意見されていることへ応えることができることも考えてみてください。計画を練り直すとともに、そろそろ財政部局に説明をはじめなくていけない。そういった時期に来たのかもしれないという気がします。

山下委員：秋季企画展で「(仮)食と縄文人」という展示が予定されているのですが、喫茶コーナーとの連携は何か考えているのでしょうか。ぜひ何かあったらいいなと思っています。

事務局：現時点ではまだ検討をしていませんので、検討したいと思います。

山下委員：そうですね。せっかく展示室で縄文人と食の特集があるのだったら、喫茶コーナーもしくはショップでも、クルミなど関連する今も食べられるものがメニューとしてあったり、お土産品としてあったりすると、連動して盛り上がるのではないかなと思います。ぜひお考えいただければと思います。

岡村会長：御所野縄文博物館は、食と何か連動するような企画展やショップとの関わりなどの取り組みはありましたか。

高田委員：ショップで直接扱うものではないですが、地元の方に食べ物をつくってもらって、ふるまうといったことはあります。

岡村会長：やはり「食」は大きなテーマであることに間違いありません。世界遺産目当てに行くよりは、その土地の食を目指して行って、ついでに遺跡をみに行くというような、観光コースもつくる時に必ず食の要素を入れていかないと成り立たないのです。より豊かになるとか、当然そういうことも含めて世界遺産の活用も考えておられるのだらうと思いますけれども、周遊の半分はうまいもの、郷土食を食べにまわる。その郷土食というのが、ほとんど縄文時代からの食を反映しているものが多いと、私は思っています。

新しくつくられた縄文食は、みんなやはり何か違うのですよね。本当の伝統食ではないのです。縄文井ですとかやっているところもありますね。食べて中からはまぐりが出たら当たりですとか。そういうことではないと思うのです。

この頃、縄文の遺跡から豆がかなり食べられていたことがわかってきています。ヤブツルアズキは小豆の野生種、ツルマメは大豆の野生種なのですが、どうも縄文時代中期頃から大きくなったようなのです。御所野でも植えているはずで、最近、

その豆で納豆づくりが行われていて、実験に成功しています。それを真似した BE-PAL のライターが自分の畑でそれをつくって、私に送ってくれたのですが、なかなか納豆になっていました。今までの定説では、納豆は藁についた納豆菌がつくる。藁苞でつくったあとですね。それが東南アジアでは枯草菌でつくられていて、納豆菌は関係ないのですね。今まで納豆は米づくりよりも、藁がない古いところでは考えられないというのが定説だったのですが、実は縄文時代から納豆を食べていたのかもしれないですね。

あと、現代とつなげるような基礎文化、草食文化の中に縄文時代初期からの納豆が結構あるのではないかと思います。ここはクリもみついているし、トチの実もいっぱい出ている。マロングラッセはどうでしょうか。それと、カチグリが縄文時代にどうもあったようで、カチグリが食料としてずっと日本の伝統食の中にあつたことは間違いない。どうも縄文時代まで遡るようなので、ぜひここでもカチグリをつくって、カチグリから芋羊羹を作るといったこともよいかもしれません。こらしい食べ物を色々と考えてみてください。

高田委員: ショップの件なのですが、こちら忙しいのかもしれませんが、世界遺産となると、来館者がどんどん来るので、今、ショップのリニューアルを進めています。今、そういう専門の会社や人が入ってショップでどのようなものをどう並べるかといったことを検討しているのですが、ここではそういう話はないですか。世界遺産になったからどんどん地元品を販売するなど、全くないですか。

事務局: 今のところ計画はないです。

高田委員: ないですか。確かに世界遺産登録を契機として売り出したいという動きがあります。ここだけの名産品にするなど色々取り組まれています。一戸町の場合はせまいですから、せまいところでお金をかけて検討しても、限られたものにしかならないとも思うのです。これを契機として、町民や関係者がそれぞれアイデアを出しあつてつくれるようになればよいと思っています。世界遺産になると色々なところから色々な話が入ってきて、本当に振りまわされてしまっているという感じです。以前から、色々な人が来るという情報は、色々な方から聞いていたのですが、それまで1回も来たことがない人がいきなり来て、世界遺産のあれはどうの、これはどうのとたくさん来るようになるので注意したほうがいいといわれていました。

岡村会長: 昔からよくあるのは、どこか指定があると、それを記念して名前をつけたお酒。吉野ヶ里遺跡でもそうだった。酒のラベルにその遺跡の名前を使うという。また同じ

ようなことが起こっています。

高田委員：ここではないですか。

事務局：地酒はないです。

高田委員：一戸町では酒屋さんがつくられていました。

岡村会長：まだありますか。

高田委員：もう売り切れました。一戸町の米を使って、八戸の水を使ってつくられました。それでつくったお酒に、高校生に名前を考えさせて、デザインも高校生に考えさせて売りたいといっていました。売るとどんどん売れて、たくさん売られればいいのですが、博物館にもということにもなり、困っています。ただ、博物館の場合は許可が必要なのですが、いずれにしましても、是川縄文館ではそういったことはないですか。世界遺産になったら色々ここで売ってくれといった声はあまりないですか。

事務局：お菓子やグッズ関係ですと、世界遺産の名前を入れたいという業者は何社かあるようです。それほど多くはない状況です。

高田委員：4年度の計画の中で、弘前大学との共同研究展示があります。ここでは、以前も共同研究の成果をわかりやすく企画展で紹介していますが、ただ、この火山ガラスの分析から成果を展示するのは非常に難しくなりそうな気がするのですが、何か工夫しようと思っていることはありますか。

事務局：研究成果をみせる展示ですので、説明をなるべく区切って単純でわかりやすくするように、パネル文章の内容などを考えていきたいと思っております。火山灰についても、例えば青森県内、あるいは北海道を含めた火山の分布を、ジオラマをつくって展示するといったことなども含めて考えたいと思います。火山灰の中にガラスが含まれていて、それが1回、2回降ることで質が違って、それが土層に重なって研究に用いられるということを順序立てて説明していければと考えています。

山下委員：タイトルが仮だと思うのですが、共同研究のタイトルが『火山ガラスからみた八戸地域における土器の変遷と地域間交流と解明』となっていますが、実際にポスターなどにする時に、どういうタイトルを考えているのですか。

事務局：共同研究のテーマはありますが、展示の名称は別に考えております。ただ、まだ具体的に案がまとめきれていない状況です。なるべく、ぱっとみてわかっていただけるような展示名称を考えていきたいと思っております。

ただ、火山ガラスなど名前を使うのではなく、研究の成果として最終的に縄文時代から平安時代にかけての物流や、人の流れといえますか、展示ではそういったこ

とに話が及んでいくと思いますので、火山活動など基本的な実務上の傾向の部分だけ知るために研究しているのではなくて、最終的に当時の人たちの何を知ろうとして、何がわかったのか。人の動きなどの研究の成果が展示の名前になれるように考えていきたいと思っております。わかりづらい説明で申し訳ございません。

山下委員:とてもわかりにくいです。要するに、火山ガラスという名前は使わないで、縄文時代から平安時代が対象ということですか。人の動きがあったということが土器からわかるということですか。

事務局:そうです。

山下委員:タイトルを考えるのは大変かもしれません。

岡村会長:7月からのことなので、急がないといけないですね。タイトルは大事ですね。非常に難しい。短くわかりやすく。インパクトを持ったキャッチフレーズ。それは早めに決めて情報発信していかないといけないわけで、まさに時間はありませんね。まずタイトルを考えることによって展示に影響しますし、実際どんな展示をという考え方を先程説明されたことでわかるのですが、そういったものを踏まえた、どんな名称がいいのか。タイトルなど展示の中身をフィードバックしながら、より適当な題名を。大変難しいですよ。

高田委員:以前の展示でも火山灰のことを扱っていますよね。火山灰そのものではなくて、例えば何らかの関わりの中で火山灰のことに触れる、特に十和田火山の火山灰などは目先の資料が揃っているし、色々とデータもあると思います。火山灰など関係する映像はないでしょうか。そういうものを使うことで、火山灰がどういう形で降下していくのかなど織り交ぜて説明するとよいと思います。

岡村会長:火山ガラスという異次元的な降下物が土器にどのくらい入っていて、その土器が、火山灰が降った範囲より遠くへ運ばれているということだけで語ろうとするわけですよ。今、高田委員から発言があったように、火山が噴火して、どんな噴火の形式があるか、それから噴火はどのようなものなのか、そうした火山そのものの全体の話とリンクさせるかどうかという話でもあります。ですからそこは早く考えてほしい。今はやはり防災ですとか、地震、津波、火山。火山を取り上げて、縄文時代から火山があって、これは人びとの生活にも大変な影響を与えたというようなことで組み立てる展示とはどうも違うということです。そこは整理してほしいと思います。土器と火山ガラスだけでおそらく展示はできないですよ。どこまで内容を広げて、しかも火山ガラスによって土器が動いたことがわかったから人の移動がいえるの

だということをどこまで説明できるのかなど、非常に難しい話です。展示の骨子早く考えて、それからどうしても展示するためには実物資料というポイントはあったほうがいいのかと思います。レイアウトを考えていかないといけない段階なのではないのですか。お忙しいことと思うのですが、楽しみながら考えていったほうがいいのではないのでしょうか。

高田委員：もう一ついいのでしょうか。是川遺跡の皿形土器展ですが、種類ごとに毎年展示しているではないですか。先程の常設展のことで話が出たけども、常設展はすごく雰囲気大事にしていて、幻想的な感じを出すように雰囲気づくりをしている。それはそれとしてやはりすごくよいと思うのです。展示室に入るところが別世界みたいで、そういったことを感じる事ができるし、よいと思うのです。ただ、土器がよくみえない。どうしてもそれはしょうがない。やはり来館者の中には土器をきちんとみたいという人が結構いるのです。是川遺跡、是川縄文館に来る人は、特にそういうことをある程度念頭にきて来る人が結構多い。ですから常設展示は常設展示としていいと思うのだけど、こういう資料展ではじっくり土器そのものをみせるようにしてほしい。特に縄文時代晩期の土器はテクニックがすごいではないですか。だからそういう部分をもてらう。逆にそれがみえるような展示の仕方が、そういう意味で資料展としてはすごくいいと思うのです。これはもう逆にいえば、今、常設展と同じような期間で併設してみられるような形にしているので、時期によって器種を変えてもいいと思います。そういったやり方もあると思うのです。そうしたみせ方を同じ場所でもやってもいいのではないか。結構よく話を聞くのです。是川はすごく雰囲気もよし、すごくよかった、すごくよいものがある。でもよく土器がみえなかったという話が結構多いので、それは確かに残念ですけど、じっくりみせるのも大事です。やはりそのためには資料展ではなくて別なテーマ、名前にして取り組むとよいと思います。

川口委員：注口土器について非常に面白いなと思っています。色々な注口土器があって、地域の交流があったというような説明があるのですが、どこの地域との交流があったのかは分布マップなどがなくてわからない。そういった説明があるのですが、では実際にはどうだったのかというようなことについて、非常に知りたいなと思ひまして、教えていただければと思います。

土器に人面がついたり動物がついたりというような非常に面白いものが展示されていて、どのように使われたかというと祭祀に使われていたみたいだと説明など

があって、なかなか推測、不確実なことなので述べられないのかもしれないですけども、想像するだけでワクワク感があるので、例えばどういった祭祀だったのかということになるべく示されると見方がさらに深まるのではないのかなと思っています。遺跡なのでなかなか推測が難しいと思うのですが、ちょっとみただけで、やはりすごく知りたくなるといったことがあります。それをお願いしたいと思います。

岡村会長：特に何が知りたくなりましたか。

川口委員：注口土器、人面などですね。動物を模したものがどういった祭祀に使われるのか知りたい。あやかっていた動物の生命力。さらに知りたくなるという気持ちですが、やはり素人にはあると思うので、そういったことに少しでも答えてもらえる説明があれば親切かと思います。特に子どもが目を通すと思います。

事務局：非常に我々の気持ちまで汲んでいただいて、なかなかパネルを書く際に可能性があるといったことを書くと結局わからないことを書いているだけなので、わかったことを書こうというようなことをやっているところです。かもしれませんといったことも足していく余地はあると思います。検討して楽しめる展示というものを考えていきたいと思っています。

川口委員：みていると聞きたくなってしまって、ワクワク感があると思います。

岡村会長：もっと解釈や可能性、それから仮説のようなものを恥ずかしがらずにいったほうがいいと私は思います。その一方で、私たちがもの凄くストイックにそういうことをいうことを控えているのに、考古学に関わりがない人が先もの勝ちでいうのです。そればかりが世間へ発信されている。そういう矛盾をもの凄く感じています。そうした書籍が賞をもらったりする。絶対に学芸員は評価できませんよ。とんでもない内容のものが売れて、しかも賞までもらう、これは専門家としては看過できないです。ですから、私たちは証拠に基づいて、可能性と仮説をわかりやすく出すべきだと思っています。それをみんな遠慮するのですよね。先駆者などはそういうことを早い者勝ちでいうとみんな軽蔑するのですよね。確かに証拠もなしに我先にとっている研究者は目立つから、そのような真似はしたくないのですが、やはり一般の人たちのためにといいますか、一般だけじゃなくて、みなさんにわかるような情報発信。ここまでわかった、あるいはここから先は解釈なのだと思うと書く必要ないので、思い切って、こういう館ですからと主張していってもらいたいのではないかと考えているのです。また、逆にいうと、あまり可能性はいいたくないという、解釈しようとしたくないという、仮説の元としないといいますか、単なる実証主義で止めてしまう

というところもあるにはあります。学問的仮説をどんどん持ったほうがいい。そうしないとトンデモ本に勝てないです。

山下委員: 解釈は自由だろうという、想像することは自由だろうということで見方としてこんなこともできるという、ある意味ではもっと身近に感じてほしいということではよいと思うのですが。ただ、やはり先生がおっしゃるように、専門でやってきた何十年と研究を積んできた方からすると、やはりそうした思いはわかります。

岡村会長: 自由なことをいって私の考えと違う考え方でものをいうのは大いに結構なのです。例えば昔の文化では、採集文化には精霊がいたりして、日本の考古学はそうした精霊を認めていない。全然議論していない。そこが抜けているのだという指摘までは新しいのだけど、そこで悩んでしまいます。どういうふうに、ものでそれをいおうとする時に、誤解を招くようなことを私は言ってほしくない。間違った、いかにも真実であるかのように。私にはこう見えるというのはいいけど、そこで止めるべきです。ただウケさえすれば何でも情報発信してもいいということは、縄文文化の本質を誤って宣言しているということになる。それは止めてほしいというのが私の考えです。

案件(3) その他について(欠席の委員からのコメントと事務局の応答について)
(事務局説明)

岡村会長: このことについて、何か質問はございますか。この内容で返答するのですね。よろしく申し上げます。それではこれで協議を終わりにしましょう。